

保育実習Ⅲ（施設）実習指導の効果に関する 一考察(2)

—エピソード記述の学習後の観察視点の変化に着目して—

古野 誠生¹⁾ ・ 飯塚 恭一郎²⁾

One of consideration about the effect of the guidance
of the nurture training judged from a training diary(2)
while paying attention to the change of the viewpoint
after the learning of the episode record

by

Nario FURUNO ・ Kyoutiro IIZUKA

【キーワード】 保育実習指導、施設実習、実習日誌、子どもの理解、エピソード記述

1. はじめに

本研究は、保育実習において学生の子どもの心的内面を捉える力を向上させるとともに、その学びを実習日誌に「考察の記述」として表す記述力を身に付けるための実習指導のあり方と工夫について、前回の研究結果を受けて修正を試みた今年度の実習指導の効果について検証するものである。

保育者の質を問うとき、その専門性として「子ども理解の力」を欠かすことができない。その力の向上には、エピソード記述や保育カンファレンスの実施などの保育の振り返りを行うことが有効であるとの報告がされている。小山(2007)は、学生らが子どもの活動や保育者の援助をエピソード記述として記録することにより幼児理解や保育者の保育を理解することに効果があると示唆している。また、鯨岡(2009)は、エピソード記述を職員間で読み合わせ、語り合うなかで、書き手自身の保育を多面的に振り返ることが可能になると、読み手も自分の保育の振り返りに役立てることができると述べている。さらに、狩野ら(2014)は、実習事後指導場面において、エピソード記述に基づくカンファレンスとポス

受理日 平成 28 年 10 月 31 日

¹⁾ 純真短期大学こども学科 助教

²⁾ 純真短期大学こども学科 准教授

ターセッションが学生の子ども理解を深めたとしている。

ところで、保育士養成のカリキュラムにおいては、保育園以外での児童福祉施設の実習が必要となる（以後「施設実習」と省略）。児童養護施設や乳児院、知的障害児施設などには、これまでの育成環境の困難さや障害などを持っている為、さらなる配慮が必要な子どもが入・通所しており、実習中の学生にも個別的な観察の視点と子どもの心的・内的状況をとらえる能力が求められる。つまり、保育の専門性としての「子ども理解の力」がことのほか問われる実習ということになる。そのため、実習指導では、子どもの内面をとらえることができるような指導内容が必要になってくる。

加えて、「実習日誌」について施設実習では、実習の学びとして施設入所者や利用者の個別の観察と心的・内的状況を考察した記述や記録が残されていることが重要になってくる。しかし学生には、それまでの保育所実習や幼稚園実習の日誌記述で学年やクラスを単位とした一斉活動やデイリープログラムを前提にした観察とその記録という記述様式が理解の中に刷り込まれている一面があり、本来であれば子どもの個別の観察と心的内面を考察した記述がなされるべきところが「一日のスケジュールを追いそれを記録する」ことに終始している実習日誌が少なくない。これは、小山(2007)¹⁾が「時系列的に一日の流れを追って記録する様式は、保育の流れを理解することは容易であっても、一人ひとりの子どもを捉える視点が育ち難い」と指摘しているとおりである。

前回の研究では、学生の実習日誌の「子ども（利用者）の反応・気づき」の内容について分析し、こどもの内面をとらえることができるようになる指導内容を明らかにしていくことを目的とした。その結果、実習指導後の「子ども（利用者）の反応・気づき」の記述の量の増加と、質の上昇が認められたが、学生のアンケートでは、自分自身ではその変化（こどもに対しての気づきをすること）について意識することはできていなかった。

そこで今回は、子どもの内面をとらえることができるようになるための指導として、二回目の施設実習となる保育実習Ⅲの事前指導において、エピソード記述の書き方の習得と、一回目の施設実習である保育実習Ⅰで経験した出来事についてエピソード記録の形式にて振り返りを実施した。また、保育実習Ⅲ終了後に学生が事前指導の学びをどの程度意識して日誌記述に取り組めていたかを調査する為、実習事後指導の中でアンケートとフリートーク形式の討議を実施した。この結果を分析、考察することで、子どもの心的内面を捉える力の向上をねらった有効的な実習指導のあり方を検討していくこととする。

本研究では、現在本学において実施している実習指導の効果を検証するべく、保育士養成のカリキュラムにおいて保育実習Ⅲを選択した学生の実習日誌の「子ども（利用者）の反応・気づき」の内容について分析した。これらの学生は、保育実習Ⅰ、Ⅲと計2回施設での実習を実施する為、一回目の実習日誌（保育実習Ⅰ）と二回目の実習日誌（保育実習Ⅲ）の内容の比較をすることによって、二つの実習の間に実施した実習指導の効果について検討を行うことができる。これらの分析・検討によって、こどもの内面をとらえることができるようになる指導内容を明らかにしていくことを目的とした。

2. 実習事後・事前指導の授業内容について

(1) 対象

本学短大生2年生 9名（保育実習Ⅰ終了後）

(2) 保育実習Ⅲ事前指導の内容

①学習プリント・アンケートの記入によって、保育実習Ⅰでの振り返りを個人で行った。

設問 1. 保育実習Ⅰ（施設）の実習を振り返って「できた」「良かった」「自信がついた」ことを書きましよう。

設問 2. 逆に「うまくいかなかった」「力不足を感じた」「疑問や悩みがふえた」と感じたことを書きましよう。

- a. 子どもや利用者への対応の場面で
- b. 施設職員との連携、共同的な仕事、コミュニケーションの場面で
- c. 施設の仕事における、支援や援助の方法で

設問 3. 実習日誌の記述について

- a. 日誌の記述を通して、何を学ぶことができましたか。
- b. 日誌の記述で苦労したこと、わからなかったことはなんですか。

②エピソード記録の書き方について、学習プリントに沿って学習した。学習プリントの内容は『中坪史典編「子ども理解のメソドロジー 実践者のための「質的実践研究」アイディアブック」ナカニシヤ出版』を参考にした。

- 1. エピソードを記録を記述することの意義
- 2. 記述の仕方

- ③施設実習中に印象に残っている事を思い浮かべ「エピソード」部分を記述した。
- ④記述したエピソードの内容について、学生自身で発表・紹介し、学生・教員と意見交換した。
- ⑤意見交換を受けて、「エピソード」部分を加筆、変更した。
- ⑥「背景」「考察」部分の記述は自宅学習とした。
- ⑦学生が記述したエピソード記録を発表・紹介し（2名分）、学生・教員と意見交換した。
- ⑧発表したエピソード記録の「考察」部分の視点と、考察の深め方について、教員が言及した。
- ⑨学習プリントの記述によって、次回の施設実習の際の自己課題の明確化を行った。

保育実習Ⅲを前に、今あなたが考える「保育実習Ⅲで学ぼうと思う自分自身の目標や実習での課題」について書きましよう。

(3) 保育実習Ⅲ事後指導の内容

①実習振り返りのプリントの記入

設問 1. 事前指導で記述した「保育実習Ⅲで学ぼうと思う自分自身の目標や実習での課題」はクリアできましたか？振り返りましょう。

設問 2. 保育実習Ⅲにおいて、「できた」「良かった」「自信がついた」「わかるようになった」ことを書きましょう。

設問 3. 逆に「うまくいかなかった」「ますます分からなくなった」「分かっただけに逆に悩みが増えた。やりにくくなった」と感じたことを書きましょう。

設問 4. 実習日誌の記述について

4_a. 日誌の記述について、心掛けていたことは何でしたか？

4_b. 実際に心掛けていたように書けましたか？

4_c. 事前指導では、「エピソード記述」と「エピソードからの洞察・考察」について学びました。この指導内容と学びは、保育実習指導の日誌記述をするのに役立ちましたか？

②記述したプリントの内容、特に実習日誌の記録について、詳細な聞き取りと討議を行った。

③実習全体の振り返りを教員と学生とのフリートーク形式で行った。

3. 実習日誌の分析による研究の方法

(1) 対象

保育実習事前事後指導Ⅲを受講した 9 名の保育実習Ⅰの日誌(9 部)と保育実習Ⅲの日誌(8 部)(保育実習Ⅲの日誌のうち 1 部は、学生の紛失により未回収)

(2) 分析の内容

①実習日誌の「こども(利用者)の反応・気づき」を全抽出

②抽出した項目について、以下に示すカテゴリーに基づき 9 つに分類を行った。

I : 観察や体験から得られた事実の記録

→実習中の観察や自分自身が体験した事柄の事実の記述がある。

II : 事実に対する感想

→事実に対する感想の記述がある。

III : 施設職員や指導員からの助言やアドバイスによる学び

→施設の職員や指導員から事柄の意味や理由、根拠等の説明、助言、アドバイスをもらい、それによって学んだことの記述がある。

IV : 施設職員からの指示や要請による介助実践や保育実践

→職員からの指示や要請をうけて、施設における仕事を実際に実践したその記述がある。

V : 介助や保育実践による結果の記録

→自分が行った介護実践や保育実践の結果の記述がある。

VI : 観察や体験からの想像、推測、予想、考察

→観察や体験からした事実をもとに自分なりの想像、予想、推察、考察したことの記述がある。

VII : 推察、考察をもとにした実践

→事実から想像、予想、推察、考察したことをもとに実際に介助や保育を実践した記述がある。

VIII：実践の反省・振り返り

→自分の介助や保育実践の振り返りや反省をした記述がある。

IX：実践の振り返りのフィードバック

→実践の振り返りや反省を次の実践にフィードバックした記述がある。

③保育実習Ⅰと保育実習Ⅲの日記の比較を、「子どもの反応・気づき」の各抽出数と分類されたカテゴリー数の比較により行った。

④変化が特徴的であった学生の日記記述について、実際の記述を抽出して、実習Ⅰと実習Ⅲの日記の比較を行った。

(4) 実習日記の形式

時間	子ども（利用者）の活動	保育者の援助・配慮 ○保育士・指導員 ●実習生	子ども（利用者） の反応・気づき	環境構成・準備

4. 日記記述の分析—結果と考察

子ども（利用者）の反応・気づきの記述数を各学生毎に表示した。（表 1）

表 1. 学生毎の実習日記「子ども（利用者）の反応・気づき」欄記述数の集計

学生	保育実習Ⅰ	施設	保育実習Ⅲ	施設	表中施設名	施設種別
学生A	38	施設A	80	施設G	施設A	児童養護施設
学生B	107	施設B	151	施設H	施設B	医療型障害児入所施設
学生C	51	施設C	87	施設E	施設C	児童養護施設
学生D	75	施設A	56	施設I	施設D	福祉型児童発達支援センター
学生E	75	施設D	39	施設B	施設E	福祉型障害児入所施設
学生F	136	施設E	110	施設B	施設F	医療型障害児入所施設
学生G	110	施設F	120	施設I	施設G	児童養護施設
合計	592		643		施設H	福祉型障害児入所施設
平均	85		92		施設I	乳児院

学生によって記述の量に差がある。保育実習Ⅰでは、記述量が少ない学生は、学生Aの38、記述量が多い学生は学生Fの136。保育実習Ⅲでは、記述量が少ない学生は学生Eの39、多い学生は学生Bの151であった。また、すべての学生が保育実習Ⅲの記述が増加したということではなかった。保育実習Ⅲの記述が増加したのは、学生Aの38→80、学生Bの107→151、学生Cの51→87、学生Gの110→120であった。一方、保育実習Ⅲの記述が減少したのは、学生Dの75→56、学生Eの75→39、学生Fの136→110であった。

さらに、子どもの反応・気づきの記述を、方法に示した分類カテゴリーで分析した結果、表2(各カテゴリーに分類した表)のようになった。

なお、表中「保実Ⅰ」は保育実習Ⅰを指し、「保実Ⅲ」は保育実習Ⅲを指す。

表 2. カテゴリー毎の実習日誌「子ども（利用者）の反応・気づき」欄記述数の集計

表中施設名	施設種別
施設A	児童養護施設
施設B	医療型障害児入所施設
施設C	児童養護施設
施設D	福祉型児童発達支援センター
施設E	福祉型障害児入所施設
施設F	医療型障害児入所施設
施設G	児童養護施設
施設H	福祉型障害児入所施設
施設I	乳児院

【カテゴリーⅠ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	19	施設A	34	施設G
学生B	91	施設B	86	施設H
学生C	41	施設C	58	施設E
学生D	7	施設A	1	施設I
学生E	28	施設D	13	施設B
学生F	70	施設E	63	施設B
学生G	69	施設F	76	施設I
平均	46		47	

【カテゴリーⅡ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	2	施設A	14	施設G
学生B	5	施設B	27	施設H
学生C	2	施設C	9	施設E
学生D	22	施設A	2	施設I
学生E	1	施設D	9	施設B
学生F	25	施設E	15	施設B
学生G	0	施設F	11	施設I
平均	8		12	

【カテゴリーⅢ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	1	施設A	2	施設G
学生B	4	施設B	4	施設H
学生C	0	施設C	4	施設E
学生D	3	施設A	32	施設I
学生E	6	施設D	3	施設B
学生F	7	施設E	5	施設B
学生G	5	施設F	10	施設I
平均	4		9	

【カテゴリーⅣ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	0	施設A	0	施設G
学生B	1	施設B	0	施設H
学生C	0	施設C	1	施設E
学生D	3	施設A	1	施設I
学生E	1	施設D	0	施設B
学生F	0	施設E	3	施設B
学生G	0	施設F	2	施設I
平均	1		1	

【カテゴリーⅤ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	11	施設A	24	施設G
学生B	6	施設B	16	施設H
学生C	6	施設C	12	施設E
学生D	7	施設A	3	施設I
学生E	10	施設D	3	施設B
学生F	17	施設E	15	施設B
学生G	34	施設F	7	施設I
平均	13		11	

【カテゴリーⅥ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	5	施設A	6	施設G
学生B	0	施設B	16	施設H
学生C	2	施設C	3	施設E
学生D	24	施設A	6	施設I
学生E	25	施設D	11	施設B
学生F	12	施設E	8	施設B
学生G	2	施設F	14	施設I
平均	10		9	

【カテゴリーⅦ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	0	施設A	0	施設G
学生B	0	施設B	0	施設H
学生C	0	施設C	0	施設E
学生D	4	施設A	3	施設I
学生E	4	施設D	0	施設B
学生F	0	施設E	0	施設B
学生G	0	施設F	0	施設I
平均	1		0	

【カテゴリーⅧ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	0	施設A	0	施設G
学生B	0	施設B	2	施設H
学生C	0	施設C	0	施設E
学生D	5	施設A	6	施設I
学生E	0	施設D	0	施設B
学生F	5	施設E	1	施設B
学生G	0	施設F	0	施設I
平均	1		1	

【カテゴリーⅨ】

学生	保実Ⅰ	施設	保実Ⅲ	施設
学生A	0	施設A	0	施設G
学生B	0	施設B	0	施設H
学生C	0	施設C	0	施設E
学生D	0	施設A	2	施設I
学生E	0	施設D	0	施設B
学生F	0	施設E	0	施設B
学生G	0	施設F	0	施設I
平均	0		0	

	保実Ⅰ	保実Ⅲ
合計数	592	643
平均	85	92

記述の量として多いカテゴリーは、Ⅰ(事実の記録)、次いでⅡ(感想)、Ⅴ(介助や保育実践の結果)。記述の量が少ないカテゴリーは、Ⅶ(考察をもとにした実践)、Ⅷ(実践の振り返り)Ⅸ(フィードバック)であった。研究目的として注目したいカテゴリーであるⅥ(観察からの考察)について、詳しくみていく。保育実習Ⅲの記述が増加したのは、学生Aの5→6、学生Bの0→16、学生Cの2→3、学生Gの2→14であった。一方、保育実習Ⅲの記述が減少したのは、学生Dの24→6、学生Eの25→11、学生Fの12→8であった。

そこで、増減が大きかった各学生(学生B、学生G、学生D、学生E)の記述についてさらに詳しく分析していく。その際、実習日誌の9日目の「子どもの反応・気づき」の部分のみをすべて列挙した。実習の学習効果が一番表れると予測されるのは10日目であるが、入所施設での実習スケジュールでは、実習最終日は子どもとの関わりは半日で終わり、残りの半日は実習日誌の記述と振り返りに費やされることが多い為、その一日前の9日目の実習日誌を分析した。

(1)学生Dの実習日誌の分析

保育実習Ⅰ 施設A(児童養護施設)	カテゴリー	保育実習Ⅲ 施設I(乳児院)	カテゴリー
行儀悪く足を椅子に立てて食べる子がいて、職員だけでなく、年上の子からも注意している様子が見れた。	Ⅰ	通院中にミルクの時間になる事を考え、ミルクを準備したためお腹が空いたとぐずった子どもに飲ませる事ができた。準備が大切と感じた。	Ⅲ
子どもが忘れそうな物を考え、声かけをする事も保育者の役割と改めて感じた。	Ⅵ	機嫌が悪い子どもを抱っこしても落ち着かず、ミルクの時間でもないため、おむつを見ると、原因の一つはオムツと分かり積極的に替えることができた。すっきりしたのかすぐ寝ていたので、気づけてよかった。	Ⅶ
小学生の子どもが、準備が遅れているのを中学生の子どもが早くするよう声をかけて見守る姿を見て本当の兄弟のように感じた。	Ⅱ	オムツ交換は、じっとしてくれる子とすぐ動いてしまう子がいて、素早くするため、オムツを取る前に、下に新しいオムツを敷いてからすると、早くできると学んだ。	Ⅲ
小学生の子どもは、急ぐ様子が見られず急がないといけないと分かっていながらも、行動にできないのかなと思った。	Ⅵ	入浴後のミルクを月齢の低い子どもに与えた時、飲む時引っかかったのか、咳をしたかと思うと、前回のミルクまで吐いてしまった。すぐ体を起こしたが、職員の方に体勢を教えてください、排気する時のような体勢にする必要があると学んだ。	Ⅲ
問題が分からずにいる、教えると解けるようになっていたが、ずっと「分からん」と言って不機嫌そうにしていた。	Ⅴ	人見知りをする子が多く、泣かれてしまった。	Ⅰ
算数のプリントを電卓でする子どもがいて、注意するものの「いいと」とやめてくれず、宿題の意味を分かって、自分で計算するよう伝えるが、止めさせるのは難しかった。	Ⅴ	次はこれを食べたいと指をさして伝えられる子の介助をした。嫌いな物を食べさせるのが大変だった。	Ⅴ
近々、お母さんとお出かけをするのか、その時の洋服等の話を楽しそうに話していた。先日、職員の方がお風呂はリラックスできる場で色々な話をすると話していたように、子どもは施設に入ってから何年目など子ども自身から話を私に聞かせてくれていた。	Ⅷ		
お菓子を楽しそうに分ける姿がみれた。全員で協力して平等になるよう一番年上の子が中心となり、分けていた。	Ⅱ		
二人の子から同時に部屋に来てと言われ、一人の子が機嫌悪くしたが、後から行くと、嬉しそうにしていたので良かった。	Ⅷ		

実習生に口頭で聞き取りをした結果、保育実習Ⅲの実習先である乳児院では、実習日誌を観察記録と一日のまとめを含めて、2枚以内で記述するように指導されていたとのことであった。その為、トータルでの記述の量が減ってしまった。表2で各カテゴリー毎に詳しくみていくと、カテゴリー

VIでは、減少してしまっているが、カテゴリVIII、IXでは、若干であるが増加している。気づきのトータル数が減少しているにもかかわらず、実践からの反省や振り返りが関係するカテゴリ部分が増えている為、この学生の分析の質は上がっているといえる。

(2)学生 E の実習日誌の分析

保育実習 I 施設D (福祉型自動発達支援センター)	カテ ゴ リ	保育実習 III 施設B (医療型障害児入所施設)	カテ ゴ リ
むらさき色の花が途中で咲いていたため、「花見ておいで」とS児に言うと、嬉しそうに、花を見に行っていた。	V	ボランティアの方や職員、実習生と一緒に、歌ったり踊ったりして、楽しんでいた。	I
N児に、Y児と手をつなぐよう伝えるとY児は自分から手をN児に差し出して、手をつなごうとしていた。	I	いつもより早く食べ終わり、「今日早かったね」と言うと、「訓練ある」と言っていた。訓練が楽しみなんだろうなと思った。	V
保育者がジェスチャーをするのを見て、Y児はジェスチャーをしてから、カバンからエプロンを出していた。	I	訓練から帰ってくると、他の寮に散歩に行ったことを何回も話していた。とても楽しかったんだろうなと思った。	V
転倒したりしそうになる子どもが、歩く時は、カバンだけではなく、保育者の足にもつまづく場合がある。	III	初めて、後半グループの食事の様子をみて、自分で何でもできていた。	II
自分が相談室に行くとは分かり、嬉しくなり、急いで保育者のところに行っていた。椅子の間を通っていた為、すぐに椅子をよけた。	VI		
ジェスチャーを見ながら言葉を聞いていた。ジェスチャーと一緒にする子どももいた。	I		
絵本が気になりながらも、保育者と手をつないで、行っていた。	I		
K児は遊びながら少しずつ食べるだけだったが、園長先生が教室に来ると、顔が真剣になり、野菜を遊ばずに食べることができていた。	VI		
野菜をスプーンに乗せておくことで、K児は食べることができていた。	III		
T児は、滑り台を頭から滑ろうとした為、「足を前に出そうね」と伝えながら、足を出してあげると、滑る事ができて、とても楽しんでいる様子だった。	V		
スライムの時のように苦手そうな表情をする子どももいた。「チワチワー」という声かけに、とても嬉しそうに触っていた。	V		
園庭で沢山遊んだため、飲むペースがいつもより早かったように感じた。	VI		

実際の記述をみてもわかるように、記述数が激減している。実習 9 日目以外の記述もみても、保育実習 IIIでの記述内容は、個別の援助による食事介助や生活介助場面が多かった。これは、保育実習 IIIの実習施設が医療型障害児入所施設だった為、不慣れな介助を実践することに追われ、観察する余裕がなかったと考えられる。

(3)学生 B の実習日誌の分析

保育実習 I 施設B (医療型障害児入所施設)	カテ ゴ リ	保育実習 III 施設H (福祉型障害児入所施設)	カテ ゴ リ
できる範囲で行う。笑顔でされる方、そうでない方など様々おられる。	I	ラジオ体操ができなかった為、プレイルームに集まり挨拶をする。	I
好きな釘打ちを一生懸命されていた。	I	当番は台拭きを用意したり、配膳当番の子は配膳をしたり役割がわかれており、頑張っていた。	I

革の布に模様をつける為、とんかちでトントンしていた。	I	与薬は床に落としたり間違えてしまう為、職員が行うのかなと思った。	VI
何を作りたいのか自分で決めていた。	I	Y君はAちゃんの事が好きでAちゃんが泣いているタオルで涙を拭いてあげなきゃと心配していて、Aちゃんが来ると隣でながさめていた。	I
講師の方が12名来られて、歌を歌ったり、歌いながらダンスをするなど、とても笑顔が見れて楽しみにしていた。	I	気持ちが乗らなかったのか、恥ずかしかったのか、Y君、K君はしていなかった。	VI
K君は、目に入った方をつかまえて、椅子を動かしたり、手洗いを頼む。	I	Y君とH君は雑巾モップで職員たちがするように掃除を手伝ってくれた。H君はどこまでした？ここした？と聞いてきて、隅々までしていた。	I
久しぶりに会う先生や友達にとっても嬉しそうだった。	I	Y君はアイスが溶ける溶けると言い、早く食べたいのかなと思った。	VI
		宿題の時間ではK君が分からなくなると手が止まってしまう。でもよく考えると解けるのでキチンと勉強できるとおもった。	II
		R君は頻繁に肘をつき、食べてしまう。職員が声をかけるとキチンとするけれど、二回目、三回目からは少し嫌そうな表情がみられる。私が言っても無視でした。	V
		Y君がいつもより、豪快に動いているなど思った。泳いでいる真似をしたり、すごく大笑いをしたり、R君が手をつなぐと驚いた顔をして手を振ったりすごくおもしろい話もしてくれて、気分がよくなったのかなと思った。	VI
		集合した後は、プレイルームでテレビを見たり自由に過ごす。	I
		K君が私の真似をし、ちょっかいをかけてきてとても面白がっていた。	I
		K君の元気がなかった気がした。	I

この学生の場合は、学生 E とは逆のパターンで医療型障害児入所施設から福祉型障害児入所施設の順番で実習を行っていた。9日目の実習日誌にもみられるように、保育実習 I の実習ではカテゴリー I の記述がほとんどであったが、保育実習 III では I 以外の記述が増えている。これは、表 2 においても同じようにいえる。また、カテゴリー VI が 0 箇所から 16 箇所に増えた。

(4)学生 G の実習日誌の分析

保育実習 I 施設F (医療型障害児入所施設)	カテゴリー	保育実習 III 施設I (乳児院)	カテゴリー
一緒に手遊びをしてくれる子もいた。	I	自分できれいに食べる子もいる。	I
しっかりと話を聞いてくれた。	V	走り回ったり、元気に遊んでいる子がいる。	I
声かけに反応して返事をしてくれる人もいる。	V	外のほうのセミの声が気になっていて指をさしていた。	VI
Nさんとコミュニケーションを図る。いろんなことをしていてもおもしろかった。	V II	座って待っており、タオルを渡すと、自分で手を拭いていた。	I
美味しそうに食べていた。	I	なかなか部屋の中に入らない子がいた。	I
声かけに反応して口を開けてくれる人がいる。	I	なかなか食べてくれない子がいて、工夫して食べさせていた。	III
Nさんを車イスから、マットへおろす。	I	なかなか寝ない子やすぐに寝る子がいた。	I
自分で脱ぎカゴにいれる、気持ち良さそうだった。	I	気持ちよさそうに(お風呂)に入っていた。	I
美味しそうに食べていた。	I	美味しそうに食べていた。	I

9日目の実習日誌や、表2(各カテゴリーの表)から分かるように、1回目ではカテゴリーⅠやⅤが多かったが、保育実習ⅢではⅡやⅥが多くなった。特にⅤが減少し(34→7)、Ⅱ(0→11)、Ⅵ(2→14)が増加したことは、見たこと、実践したことの事実の記録から、事実から自分なりに考えようと実践した結果であるといえる。

表1での増減の学生と表2のカテゴリーⅥでの増減の学生が一致した為、記述数のトータルの増減が、各カテゴリーの増減に結びついたようにみえた。しかし、各学生のデータを個別に分析したところ、トータルの気づきの量が減少した学生でも、カテゴリーⅧやⅨが増加しており、保育実習Ⅲの実習において、事実から子どもの状態を読み取ろうと努力したことが分かった。

5. 実習事後指導におけるアンケート調査の結果

ここまで、保育実習Ⅰと保育実習Ⅲの日誌の記述内容を比較、精査することで保育実習Ⅲの事前指導の効果を検証してきた。続いて、学生が事前指導の学びをどの程度意識して日誌記述に取り組んでいたかを調べるべく、学生本人に自由記述のアンケートを採った。前回の研究においては、日誌記述内容の変化が著しいと評価した一部の学生を対象に口答インタビューという方法で調査したが、その内容とほぼ同じである。本研究においては、そのアンケートを保育実習Ⅲを履修した学生全員を対象に実施した。また、自由記述のアンケートであるため、補足説明を必要とする内容もあり得ると考え、事後指導の授業の中でフリートーク形式の討議を実施し、アンケートの回答記述の背景や理由等を聞き取った。

アンケートの質問項目は以下の3つである。

- Q1: 日誌の記述について、心掛けていたことは何でしたか？
 Q2: 実際に心掛けていたように書けましたか？
 Q3: 事前指導では「エピソード記述」と「エピソードからの洞察・考察」について学びました。この指導内容と学びは、保育実習Ⅲの日誌記述をするのに役立ちましたか？

この質問に対する学生の回答記述は以下の通りであった。

- Q1: 日誌の記述について、心掛けていたことは何でしたか？
- ・疑問に思ったことはしっかり記録するようにしていました。
 - ・子どもがどんな行動をした時に職員はどんな関わりをしていたのか照らし合わせて思い出し書くようにした。
 - ・目標をその日の朝に決めて、前日と当日の変化について書く。
 - ・一日の中で気になったこと、子どもに対しどう接したら良かったのか分からないことは書くようにした。子どもの心の変化が分かるような動きをした時は書くようにした。
 - ・早く終わるようにした。
 - ・誤字、脱字がないように心がけた。
 - ・一日の行動と利用者のもので気づいたことを書く。
 - ・早く書けるようにどこを書くのか工夫できるようにする。

Q2: 実際に心掛けていたように書けましたか？

- ・書けました。気付きに対して口で説明してもらえたので良かった。
- ・心掛けるようにしていたが、それを思い出している内にいつの間にか寝ていたりして、睡魔との戦いだった。
- ・うまく思っていることを文にすることが難しく読みにくかっただろうなと思います。
- ・早く終われることができるようがんばった。
- ・1時間で書き終わりました。少しだけ誤字がありました。
- ・書けたが、利用者のことは少ししか書けませんでした。

Q3: 事前指導では「エピソード記述」と「エピソードからの洞察・考察」について学びました。この指導内容と学びは、保育実習Ⅲの日誌記述をするのに役立ちましたか？

- ・役に立った。
- ・環境構成、気づきの面で、どんな視点で書けば良いか分かるようになった。
- ・気づきが多くてすごくいいと思うと（施設の職員に）言われました。ミクロな視点で見て良いと分かって、全体全体と頑張りすぎず過ごせたように思います。
- ・具体的に書けた。
- ・実際に書けていたか分からなかったけど、気づきは一回目（の実習時より）書きやすかった。
- ・一つ目（一回目の実習）ではどんなことを書くのか分からなかったけど授業を受けて少しは書きやすくなった。

6. アンケート調査とフリートーク聞き取り調査による分析と考察

アンケート記述の内容からは以下のことが読み取れる。

- ・日誌は負担が大きく記述は骨が折れる。できれば短時間で記述して次の日の実習に向けて英気を養いたい。
- ・一回目の施設実習時の日誌記述の時よりも「気づき」の欄は書きやすかった。
- ・一回目の施設実習時よりも観察の視点が明確になった。

調査・研究の対象となった学生にとって、保育実習Ⅲは幼稚園教育実習を含め通算で4回目の実習にあたる。それを思えば、実習日誌の記述については十分に慣れていてもおかしくないが、アンケートの回答を見る限り、それでも日誌記述は学生にとって負担感の大きい作業であることがわかる。

ただ、本人達の実感としても「気づきの欄が以前に比べて書きやすくなった」という声がいくつか挙がっている。しかもそれは「観察の視点が明確になった」ことによるものであることが回答からうかがい知れる。実習指導においては、観察によって対象児や施設職員の指導の様子からエピソードを拾い、そこからエピソードの背景にあるものや心情について洞察、考察を巡らせることを指導の力点としたが、これらの回答からは、洞察や考察以前にエピソードを拾うに当たって、まず観察の視点を焦点化することの力量が上がったと感じている学生がいることがわかる。

特に「ミクロな視点で見て良いと分かって、全体全体と頑張りすぎず過ごせたように思います」という回答に注目したい。「ミクロな視点」とは、この保育実習Ⅲの事前指導ではなく、幼稚園教育実習Ⅱの事前指導の中で、日誌記述指導の内容に盛り込んだキーワードである。全実習の5回目にあたる幼稚園教育実習Ⅱの日誌記述あたって、実習クラスの1日の保育の流れやクラス活動全体の把握や理解といった「マクロな視点」による観察ばかりに注力するのではなく、個々の子どもの遊びの様子や実習生である自分と子どもとの一対一のかかわりの場面、担任保育者が個別に子どもにかかわっている場面など、観察の視点を「マクロ」から「ミクロ」に意識的にシフトさせるように指導を行った。上記の回答はそのことを述べている。

保育実習Ⅲを履修した学生は、保育実習Ⅲ終了後に実習5回目となる幼稚園教育実習Ⅱを履修するため、この事前指導を受けており、そして保育実習Ⅲの事前指導においては、この「マクロな視点からミクロな視点へのシフト」ということを前提にエピソード記述と洞察・考察記述の指導を行っている。実習日誌の記述がややもすればクラス全体の動きや活動の把握や1日の流れを追うことばかりに力点が置かれてしまうことは「1.はじめに」でも述べたが、この回答の「全体全体と頑張りすぎず過ごせた」という記述からは、全体の動きを追うことばかりに意識が向いてしまう学生の保育観察に対する固定概念が背景にあることがうかがえる。こうなると、マクロな視点での観察はいったん置いておくくらいの指導をしなければ、エピソード記述にいたる観察もそれに続く洞察・考察にも繋がらない。

今回は、幼稚園教育実習Ⅱの事前指導でマクロな視点の呪縛を解いたうえで、保育実習Ⅲの事前指導においてミクロな視点による観察を前提に念入りにエピソード記述と洞察・考察記述の演習を行った。これによって学生自身の手応えとして「観察の視点が明確になった」「気づきの欄が書きやすかった」という回答になったと考えられる。観察の視点がマクロからミクロにシフトしたことを明確に自覚されている学生の回答はひとつだけであるが、「気づきが書きやすかった」と回答している学生も、エピソード記述と考察に至るミクロな視点で観察する力が伸びてきていると評価してよいだろう。

またアンケート回答後のフリートーク討議において、興味深い発言があった。前述の通り、これらの学生は、保育実習Ⅲ終了後、幼稚園教育実習Ⅱを履修しているが、そこでの日誌記述は「とても楽だった」という意見が出た。とりわけ「気づきの欄を書くのがとても楽になった」そうで、「(実習中)書きたいことがたくさん見つかって、思いつくまま書いていたら日誌用紙が足らなくなるところだった」という意見もあった。これには事後指導を受けた学生の半数が一樣にうなずき同意する様子があった。つまり、ミクロな視点に切り替えて保育を観察したところ、気付いたこと考えたことをたくさん拾うことができたという手応えを得ていると理解することができる。

ただ、このアンケート結果とフリートーク討議の内容は、必ずしも実習日誌において保育観察から洞察・考察する力が向上しそれが記述できるようになったことを示すものではない。単に観察から「気付くことが多くなった」「それを書き記すことが楽になってきた」ということにすぎない。その意味においては、一連の実習指導のねらいは達成できているとは言い難い。また、日誌を記述する作業そのものを学生は大きな負担と感じているとなれば、観察による気づきから実際には洞察や考察を巡らしているにもかかわらず、「考察の

記述」という時間のかかる作業を意図的に避けている可能性も否定できない。今回の研究においては、日誌記述の現実の有様を深くあぶり出すまでの質問になっていないため証明はできない。この問題については、実際の実習指導の内容においても、それに関わる研究においても次の課題としたい。

7. おわりに

最後に、実習日誌の記述内容の分析・考察と、アンケート調査とフリートーク聞き取り調査の分析・考察の結果を合わせて総合的に考察を試みたい。

まず、施設実習に関しては、施設の種類によって入・通所者の年齢構成や生活実態、障害の有無などの差違が大きいため、実習内容や実習における学びの比較は容易ではないということが挙げられる。また、このことは当然実習日誌の記述内容に反映されてくる。極端な事例でいけば、学生 D のように、保育実習Ⅲの実習先である乳児院から一日の日誌記述を 2 ページ以内にまとめるよう「指導」がなされるようなケースがある。

記述数の数だけで言えば、学生 D あるいは学生 E のように、保育実習Ⅰの日誌記述では記述内容分類カテゴリー V や VI の記述ができていたにもかかわらず、その後の実習である保育実習Ⅲの日誌ではカテゴリー V や VI の記述が減っているケースがある。ではその原因が、保育実習Ⅰを経て保育実習Ⅲに至り、その段階で考察することや記述する能力を喪失してしまった結果であるとは考えられない。実習を通して保育の専門性や考察する力や記述能力を着実に向上させているものの、本人の能力向上とは別の要因により現実的には「記述するに至らない」ということが少なからずあるということがわかる。

またアンケート結果では、学生にとって日誌を記述することそのものが相当の負担であることが明らかになっている。学生によっては、この記述の労力と負担感から逃れたいあまりに、意図的に考察記述を避けている可能性もある。もちろんそうした日誌は記述内容がたいへん「薄い」ものとなり、実習先の指導者から指摘と指導を受けることになる。ただこれも、現実的には実習施設の実習生に対する指導体制や指導者の意識によって内容の薄さが黙認されているケースもあり、日誌記述に取り組む根本的な心構えや状況が記述の量に影響することは否めない。

それらを考え合わせると、学生の考察する力や記述能力の向上の度合いを調査する手がかりや手法として、記述内容の「質的な評価」「質的な分析」による研究手法を取り入れることを検討する余地があるだろう。本研究においても、たとえば学生 D は、気づきの数は保育実習Ⅲでは減っているものの、カテゴリーⅧ、Ⅸに分類できる記述が増えており、記述内容の「質」という視点で見れば、確実に能力が上向いていると評価できる。また、学生 G の日誌記述内容の質的な評価も同様である。

一方で、数的な集計と分析の研究手法も外すことはできない。アンケートやフリートーク討議の内容を見ると、考察の入り口ともいえるべき「気づき」や「発見」を得ることや、エピソードを拾うことが「楽になってきた」「容易に感じられるようになってきた」という手応えを学生自身が感じていることがわかる。これは、マクロな視点からミクロな視点にシフトさせて保育観察をするよう指導を行ったことが功を奏したと推測されるが、そうになると、保育観察による「考察」の記述であるカテゴリーⅥに分類されないまでも、ⅡやⅢに分類される記述がこの指導方法により増えてくることも期待され、それは前回の研究か

ら継続しているカテゴリーによる記述内容の分類・集計と分析という数的な研究手法によって明らかになると考えられる。

養成校教員の立場としては、より適切な実習指導をするために、学生が二年間の保育実習や教育実習を経てどのような経験と学びの道筋をたどって保育の専門性を高めているかを把握する必要があるが、そのためには実習日誌の内容を頼りにせざるを得ない。しかし本研究で明らかになったように、日誌の記述内容そのものの量は、必ずしも学生の成長を裏付けるように増加しているとは限らない。

ただ本研究では、保育観察の視点をマクロからミクロにシフトしていくという指導内容の工夫や、実習指導の効果を検証していく手法に質的な研究アプローチを検討していくことなど今後の課題や示唆を拾うことはできた。これらを今後の実習指導に有効に生かし、ミクロな視点による観察からエピソードを拾い、深い考察から子どもの心的内面を捉えることができる保育者の養成に繋げていきたいと考える。

引用文献

1. 小山祥子(2007) 幼児理解と保育者の援理解を深める保育記録に関する研究(Ⅱ)－エピソード記録型実習日誌の効用と課題－ 北陸学院短期大学紀要, 39, pp.45-58

参考文献

1. 鯨岡峻(2009) エピソード記述を通して保育の質を高める 保育学研究, 47(2), pp.133-134
2. 狩野奈緒子 坂本真一(2014) エピソード記録を活用したグループワーク－実習事後指導の中での対話の重なり－ 桜の聖母短期大学紀要, 38, pp.1-14
3. 小山祥子(2007) 幼児理解と保育者の援理解を深める保育記録に関する研究(Ⅱ)－エピソード記録型実習日誌の効用と課題－ 北陸学院短期大学紀要, 39, pp.45-58
4. 中坪史典編著(2012) 子ども理解の方法ロジー 実践者のための「質的実践研究」アイディアブック ナカニシヤ出版
5. 古野誠生 飯塚恭一郎(2014) 保育実習Ⅲ(施設)実習指導の効果に関する一考察 純真紀要, 56, pp.65-78